

変わりゆく時代で自由に生き抜く「DNA」を抽出したパワーアルバム。

倅田來未の進化が止まらない。

単なるポップアルバムと形容するには手に余る作品「DNA」を完成させた。楽曲のディテールに拘ったからこそ音楽に集中して聴いてもらいたい気持ちが募り、ここ数年はバラエティー番組への出演等、音楽以外の活動を控えてきたと彼女は語る。それほどに今のミュージシャン倅田來未の芯は太く、熱い。

近年の彼女を知らない人達や夏フェスが好きな音楽ファンにも、彼女の今を知って貰いたい。攻撃的で妖艶でセクシーだけど、優しく包んで離さない今作「DNA」について話を聞いた。

-今年の初めに出したAND と対になっている今回の作品「DNA」は、前作からわずか半年での異例な速さでのリリースとなりましたが、どのようなコンセプトで作られたのでしょうか？

「前作AND の楽曲はファンクラブツアーで演ろうというのが先に決まっていて敢えてコアな曲を盛り込んでいたアルバムで、J-POP が好きなファンの方にとっては難しいのかなと思える曲も入っていたのですが「LIVE を見てくれたら好きになってくれるだろう」という思いでファンの方と私の音楽性を繋ぐという意味でAND と名付けました。今回それをひっくり返したタイトルのDNA は、私が18 歳まで聴いてきた歌謡曲であったり、デビューしてから聴き始めた洋楽のR&B やhiphop、rock やreggae の音楽性を含めたすべてが倅田來未のDNA であって、そのサウンドスパイスを盛り込んだ倅田來未の音楽の「DNA」が集結した作品になればいいなという思いで作りました。」

- 確かに前作に対して今回は色んな表情を持つジャンルレスな作品だと思いました。まず曲順が聞きやすい並びになっているなど感じました。

「ほんとですか？今回は本当に悩んで。というのもファンクラブツアー中だったので、ツアーの合間を縫ってギリギリまでレコーディングをやっていて、デモ段階である程度曲順を決めていてもヴォーカル録

りを終えると曲のイメージが変わったり、同時にDNA TOUR の曲順も思い浮かんできて、LIVE のセットリストの順番と被ってもいけないから気を配って大変だったのですが、やり遂げた作品だったので聴きやすいと言ってもらえて良かったです。今の自分を200%出し切れたアルバムになりました。」

- LIVE の演出が見えてくる様な抑揚のある曲順だと感じました。

「LIVE の演出も10年以上やっていると、ここ8年くらいはLIVE を意識した楽曲制作になってきました。(ダンスの)振りや衣装など空想して曲を選考していたのですが、ファンの方に昔のくうちゃんみたいな曲はやらないんですか？と言われていたり、LIVE でのアンケートを見るとキャッチーで歌える楽曲も人気ということもあり、これまで楽曲制作して下さった作曲家のHi-yunk さんや葛谷葉子さんの楽曲も入っています。ファン向けのAND と比べるとDNA はキャッチーな曲が揃っているのかなと思います。」

- 始まりを期待させるイントロの後、今年のシングルのHUSH で幕を開けていますね。ANDに入らずに今作に入ったのには理由があるんですか？

「HUSH は私の中でAND に入るよりはキャッチーなイメージが強くてDNA に入れたかったというのと、ツアーの演出を考えた時にこの曲はホールツアーの方がライブハウスよりも演出映えするだろうという構想があってDNA 発売まで引っ張ったという経緯もあったんですね。」

- 歌詞にも印象的な部分があります。「つま先から頭まで 遊び、仕事、、get burned」という箇所には、なんだって中途半端にやるのは格好悪いと言われている様で力強いですね。

「私自身がそうなのですが、遊びも本気、仕事も本気でやって燃え尽きるというスタンスでやっていけば人生は楽しいという思いと、意地悪を言うてくる人たちを鎮火させてやるという内容の曲で、仕事を頑張っている人達に「よし、今日も出勤！」と思って聴いてもらいたいです。single 曲をアルバムの頭に持ってくることはあまりないのですが始まり感がある曲なので今回は冒頭に持ってきました。」

- 今作では久しぶりに作曲にも挑戦したという話も伺いました。それが…

「Dangerous ですね。これは発表してから時間が経ったPOP DIVA や UNIVERSE の様にLIVE で必ず歌う自己紹介の様な楽曲をその頃からアップデートしたいという思いがあって、皆のテンションが上がって尚且つ口ずさめるPOP DIVA を超える曲を作りたいというオファーを Hi-yunk さんにして。」

- 作曲は具体的にどの様にして関わったのですか？

「元々Hi-yunk さんがプレゼンしてきてくれた曲の納得がいかなかった部分に「もっとこうしたい」という話をして一緒にスタジオに入って元々のトラックの素材を消したり自分でマイクの前に立ってメロディを作って変えたりしました。その時に彼が「いいじゃん」と背中を押してくれたこともあって、10年ぶりに自分で作ることができました。ゼロから作るというよりはリアレンジしたという感じですね。既にa-nation の一曲目に演ったんですけど、SNS で告知したのもあってファンの方が予習してくれて、すぐ盛り上がれてひとつになれたと感じましたね。」

- WATCH OUT!!～DNA～もHi-yunk さんと作ったんですか？

「これはスタジオに遊びに行った時にちょうどHi-yunk さんが格好良い曲を作っていて、何これ？と。」

- よこせ、と (笑)

「違うアーティストさんに使う為に作曲をしてみたいなんですけど、「それは私にください…」という横入り物件の曲なんですけど…」

- (笑) タイトルにDNA と入るくらいアルバムの表題曲なのかなと感じました。

「そうですね。今は世の中に情報が溢れすぎている分、自分達発信じゃなくなってきて情報に惑わされる人が増えていると感じる中で、良いものと悪いもの見分けながら世の中でどう過ごして行くのか。この歌詞の主人公っていうのは、最終的にぶれずに自分のグルーブに引

っ張って行くという自分を持っている強い女性を描いています。」

- 変化する時代に流されるなという意思とサウンドが共鳴した力強い楽曲と感じます。ちなみに昨今のSNS での誹謗中傷や情報過多の社会にはどう思われますか？

「私は、見たい人が見ればいいという感じで、基本的には見ないです。だから自分のインスタとかSNS は何か言われるかとも思っても、これが倅田來未だし。というのがボーダーラインになっていて、私はやりたい様に発信していますね。」

- ScREaM がまさにSNS に対する曲なのかなと感じました。

「そうそう。まさに。こういうポップな曲だからこそ強めの歌詞が使えるというのがあって、制作段階では楽しかったですね。」

- 確かに歌詞だけ見ると「あいつのsnake face 舌を巻き偉そうに」という部分もあるけど、過激さはあまり感じないのは不思議ですね。

「ハイリスクハイリターンって言葉がある通り、発信した時にネガティブな反応が返ってくるということは気にされているということでもあって、逆に反応のない時の方が気にかけてもらえてないという気持ちでやっていて、だから何か返ってくる時は凹まずにチャンスだと受け止めて欲しいと思っています。」

- メッセージ性の強い曲としてCHANCES ALL はDNA に入るには相応しい曲だなと感じました。ファンの人たちにはどの様に聞いてもらいたい曲ですか？

「毎回アルバム一枚につき今一番メッセージとして伝えたい想いっていうのを歌った曲が必ず入っていて、AND で言えばNEVER ENOUGH っていう曲だったのですが、CHANCES ALL もそのうちの一つで、倅田來未というのは派手なタイプのアーティストなので色眼鏡で見られる部分があって基本的には愛を持って歌を届けたかったり、人を好きだったりというピュアな気持ちを持っているんだけど、どうしてもヴィジュアル面だけで下品だとか怖そうとか言われることがあって「ピュアな唇 毒づくやつ 行動する勇氣 ないよりまし」ってところは一番言いたいところで、私の周りの方や、ファンの子の中には見た目派

手だけど実は打たれ弱かったり実は会社で泣きたくても泣けない立場であったり、一生懸命に世の中で闘っている女性がたくさんいる中で見目で判断される悔しさっていうのを感じていて。そういう風に思われながらも基本的には自分の上にはいつも虹がかかっている、いつもハッピーでいたいと思って歌っているし、見た目がどんな人でも誰にでもチャンスはあるよって歌いたかったんです。」

- 続く「会えなくなるくらいなら」は片思いの切ない気持ちを歌ったバラードですね。

「私は35歳になって結婚して7年目になるのですが、「会えなくなるくらいなら」の様な恋の話というのが結婚してから今後どうしていいのかなと模索した時期があって。」

- 恋について歌うか歌わないかということですか？

「歌うべきなのか悩んだことがあったのですが、結局旦那さんに今でも恋をしているという部分があって、電話が掛かってこないと切なかったり、今も恋はしているんだなという自分に気が付いたので、独身時代の気持ちに立ち返って歌詞に落とし込んでみたんです。」

- MV になっているHAIRCUT もメッセージ性の強い楽曲ですよ。

「このアルバムの中で最初に出来たのですが、レコーディングの段階でDance In The RainのMV を一緒に作ったYKBX さんがすぐにイメージ出来て、曲は洋楽っぽいところがあるのでMV で見せた方がファンの方には伝わりやすいのかなと思い、決別の比喻表現としてハサミで髪を切るというのを表現しました。」

- ここでの決別は一曲前の「会えなくなるくらいなら」で失恋した主人公の恋する相手への別れの決意表明としてストーリーが繋がっているのかなと思ったのですが、そういう狙いはありましたか？

「それは…じゃあ…そういうことにして頂いて。(笑)」

- (笑)

「私は落とした後に上げるっていうのが好きで、曲順の流れとして

「会えなくなるくらいなら」で一旦落ちたテンションをもう一度引き上げたくてHAIRCUT はアルバムの中でもリスタートの意味合いもあるんですよ。」

- なるほど！そのテンションのままブラッククローバーの主題歌にもなった「Guess Who Is Back」が続きます。サウンド面も新たな倅田來未の扉が開いたイメージがありました。

「そうなんです。元々、P!NK、リンプ・ビズキットやエヴァネッセンス等が好きで、今回ロックチューンをブラッククローバーの方からオーダーして頂き、エヴァネッセンスみたいな今までにない曲がやりたかったので、レコーディングの時は新しく楽しくて。私の中ではダンスを意識しつつも、過去にないくらい張り上げるハイトーンボイスの曲なのですが、サビのGuess Who Is Back の部分をファンに歌ってもらってコールアンドレスポンス出来そうな雰囲気があって抑揚もあり面白い曲に仕上がったなと思っています。」

- 個人的には全部を通して聴いて最初に耳に残った曲が次のHOT HOTなのですが。

「へー！その曲は周りでも好きって言ってくれる人気曲で、レコーディングもスムーズにいった曲ではあるのですが私的にはアルバムの中でもコアに攻めた曲の印象でした。」

- この曲は一番妖艶でセクシーな倅田來未さんらしさが出ていると感じました。

「ファンの方にも昔のくうちゃんみたい。って言われて、キャッチー路線で作ったつもりがなかったので、この曲が！？という戸惑いがありました。その反応は予想外でしたね。」

- そして「心からi love u」というストリングが美しいラブバラードに続きますね。

「これはタイトルで悩んで、倅田來未は英語のタイトルが多かったので、敢えてベタに「はっ。」とするタイトルにしたくて、そのまま歌詞から持ってきました。」

- この曲は王道なのですが、このアルバムで聴くと異質で新鮮な響きがありました。

「発売前に全曲試聴っていうのをやったのですが、この曲は一番人気でしたね。やっぱり王道の倅田來未バラードに仕上がったからだと思いますんですけど。ただ本当に難しいんですよね。」

- そして來未さんの可愛らしさの部分を押し出したWorkThat に続きます。気がついたら実際に鼻歌を歌ってしまったほどとてもキャッチーに感じた曲です。

「WorkThat は実は去年のsingle 候補だった曲で、WHO（前作「AND」収録楽曲）、HUSH と競り合ったんですよね。これは夏っぽいイメージがあって、その時のリリース時期が夏ではなかったのでDNA 収録まで流れていたんです。外面良い人ほど実はそうでもない男の子の話を歌っています（笑）」

- この曲もLIVE でコールアンドレスポンスして楽しめる曲になっていると思います。そしてアルバムの最後を飾る楽曲としてPin Drop という曲がありますがタイトルにはどういう意味が込められているのですか？

「Pin Drop は静寂の中で針を落としても音が聞こえるっていう、それくらい静かかっていう意味でどんな静寂の夜だとしても、最終的に皆に楽しかったと言わせるしhands up して皆を楽しませてあげるという想いを込めて作りました。本来なら一曲目に持ってきても良い曲なのですが、敢えて最後に入れたのはアルバムをリピート再生したときにまた一から始められるように気持ちいい曲を持ってきたいというのがあってこの曲を最後にしました。もう一つ目的地や行き先という意味もあり、またPinDrop した場所へ戻るといった意味合いも込めて最後にしました。」

- 最後に総括してこれから聴く方々にメッセージをお願いします。

「今回は口ずさめる楽曲も多く盛り込んでいて、LIVE で演出映えする楽曲も多く集まり楽しんでもらえるアルバムになったと思います。歌謡曲から最新の音楽シーンまでを盛り込んだ倅田來未のDNA を感じてほしいので是非LIVE にも足を運んでください。」

このインタビューをする合間の何気無い会話の中で、好きなアーティストのLIVEを観る為に海外へ足を運び、生で身体が乗せられた体験談を嬉しそうに話してくれた。

発売日にアルバムを買いに行き、仕事終わりに走ってライブハウスに行く私と何も変わらないピュアな音楽リスナーの倅田來未がそこに居た。その熱量がアウトプットされたこのアルバムは、35歳となり結婚を経て母親となった彼女の根底にある色々な愛の結晶。まさに彼女の「DNA」が反映されているこの作品は、変化する今の時代を生き抜く為に必要なパワーアルバムだと感じた。

Interview&text by gen kato